

愛と死をみつめて

2008(平成20)年10月12日鑑賞(DVD鑑賞)

★★★★



監督＝斎藤武市／原作＝大島みち子、河野実『愛と死をみつめて』（大和書房刊）／出演＝浜田光夫／吉永小百合／笠智衆／原恵子／内藤武敏／宇野重吉（日活配給／1964年日本映画／117分）

第2章

新旧半々のラインナップ

……小説と歌と映画で、『セカチュー』（04年）をはるかに凌駕する社会現象を生んだのが、ミコとマコのラブストーリー。それは多くの日本人を、東京オリンピックの感動とは異なる涙、涙また涙の世界へ。吉永小百合19歳。そんな一番綺麗な時期に、顔の左半分をガーゼで覆った静かな熱演に注目！遠距離恋愛に不可欠な、ケータイメールではない手紙の威力について再認識したいものだ。

1964年の社会現象を今あらためて

「マコ……甘えてばかりでごめんね ミコはとっても幸せなの」。こんな歌詞で始まる歌をあなたは知ってる？ これは青山和子が歌い、1964年の日本レコード大賞を受賞した『愛と死をみつめて』。軟骨肉腫という難病に冒された小島道子（ミコ）と、彼女を愛し3年間も支え続けた恋人高野誠（マコ）との間で交わされた文通書簡をまとめた『愛と死をみつめて』は1963年に出版され、160万部を売り上げる大ヒットとなった。そんなミコとマコのラブストーリーと悲しい結末を映画化した、吉永小百合・浜田光夫の純愛コンビの代表作がこれ。いわば「難病モノ」の走りだが、2006年に草薙剛、広末涼子主演でテレビドラマとして放送されたから、若い人たちも知ってるのでは？ また、2004年には難病モノの傑作セカチューこと『世界の中心で、愛をさけぶ』が社会現象になったが、1964年の本作はそれ以上の社会現象。

1964年といえば東京オリンピックの年。日本人は一方で女子バレー、体操、レスリングを中心とする五輪での日本人選手の活躍に喜び、他方で『愛と死をみつめて』の悲しい結末に涙したわけだ。吉永小百合が『愛と死をみつめて』に出演したのは19

歳の時で、多分一番綺麗な時。そんな1964年の社会現象となった『愛と死をみつめて』における吉永小百合の、顔の左半分をガーゼで覆った静かな熱演に注目！

遠距離恋愛では、手紙が命

ミコが入院していたのは阪大病院。他方、信州出身のマコが通うのは東京の某大学。したがって、あるきっかけで知り合い交際を始めた2人は、いわば遠距離恋愛の走り。しかし、バイトで稼いだお金だけでは東京～大阪間を再三往復することはできないから、2人の交際は文通を中心としたものに。今は何でもケータイメールだが、1964年当時の遠距離恋愛は手紙が命。書籍がベストセラーとなったのは、切々と綴られた2人の気持の純粹さに心打たれたため。そんな文通集を映画化したのだから、そこには心に残るエピソードや名言がいっぱいだ。その例を3つだけ挙げておこう。その1は、あなたに病院の外で健康な日が3日あれば何をしますか？ ミコは、1日目は故郷へ飛んで帰る、2日目はあなたのところへ飛んでいく、そして3日目は1人で思い出と遊ぶと書いたが、さて……？ その2は、マコは直球型の人間でウソが大嫌い。ある日病状を心配するマコに対して、ミコが「大丈夫」と言ったことがその後ウソだとわかったから大変。マコは「なぜ、僕にウソをつくんだ！」と怒り出すことに。そんなマコに対するミコの手紙は、「貴方に教えてあげたい。人は時には悲しい嘘をつかねばならないことを」というもの。さて、このセリフをどう理解？ その3は、病状が絶望的な状況に至っていることを知ったミコは何とかそれに耐えたものの、そこで書き残した手紙は「私が今一番ほしいもの、それは密室。その中で声の続く限り泣いてみたい」というもの。こりゃ、涙なしで読めないのでは？

2人のベテラン、笠智衆と宇野重吉に注目！

笠智衆は小津安二郎作品に欠かすことのできない名優だが、その笠智衆がミコの父親正次役として存在感を見せているから注目！ もう1つ注目すべきは、出番は少ないものの感動的なシーンが強く印象に残る、ベテラン俳優宇野重吉が演ずる入院患者で車イスに乗っている中山仙十郎。

難病と闘いながら毎日を懸命に生き、中山の洗濯物の世話までするミコの心の美しさに感動している中山が、ミコの病室に入り、「道子はん！ わしが代わりに死にかかった！」と叫ぶラストシーンでは、思わずどっと涙が溢れ出ることに。

タイガース優勝 vs. タイガース散る

阪大病院に入院しているミコは大の阪神タイガースファン。したがって、ラジオで野球の実況中継がある時は、ラジオが必需品。しかして、『愛と死をみつめて』が開された1964年、阪神タイガースは？

当時の阪神タイガースは藤本定義監督。1962年に小山正明、村山実両エースと、遊撃手吉田義男、三塁手三宅秀史、二塁手鎌田実ら鉄壁の内野陣で見事リーグ優勝を果たした阪神タイガースは、1964年にはエース小山と大毎オリオンズの4番打者山内一弘とのトレードを成立させたうえ、バッキーが小山の穴を埋める大活躍。その結果、大洋ホエールズとのギリギリの闘いの中、最後の9連勝によって見事逆転優勝。映画の中でミコが必死にラジオに聴き入っているシーンが見られるが、それはこんな劇的な試合を阪神タイガースが闘っていたためだ。しかるに、2008年の今年は何がこの評論の完成をギリギリまで延ばしていたのは、CS（クライマックスシリーズ）における阪神タイガースの行方を見守っていたため。最大13ゲームもあった大差をひっくり返されての巨人による大逆転劇に続いて、今年の岡田タイガースは勝率5割そこそこで何とか3位に残った落合中日とのCS第1ステージで敗退することに。

46年前の名作『愛と死をみつめて』をあらためてビデオ鑑賞して何度も涙を流したが、阪神タイガースの今昔についても、こんな思いを新たに……。

今昔の感を新たにすることがもう1つ

私は「タバコ1000円法案」の1日も早い成立を願っているが、アメリカ発の世界的金融危機が広がる中、「金融安定化法案」などの法案成立が優先され、「タバコ1000円法案」は目下カヤの外……？ そんなことを考えながらこの映画を観ていると、タバコに関して今昔の感がふつつと……。今では飛行機や新幹線の中では禁煙が当然だし、病院内でも禁煙は常識。しかし、46年前の阪大病院では……？

第1に驚いたのは、マコが東京からミコの病室にお見舞いに来た時、「まずは一服」とタバコを吸い始めたこと。第2にそれ以上に驚いたのは、病状の説明をするために主治医（内藤武敏）がミコの病室に入って来た時、何と主治医もタバコに火をつけたこと。今では到底考えられない風景だが、46年前はこれが普通だったのだ。そう考えると、タバコについての今昔の感を新たに……。 2008(平成20)年10月22日記